

研究会、分科会も活動範囲を広げ、10月の年次学術大会ホットイシューでは、パンデミック環境の得失をテーマに、関西支部から13件の発表がありました。12月には関西支部200回記念研究会も開催できました。本号では、「年次学術大会(速報)」と、「200回記念研究会」を報告します。話題のコラムには「(米国)PICMET2024に参加」と「(釜山)国際地質学会に参加して」を紹介します。「関西の大学シリーズ」では近畿大学原子力研究所を取り上げます。

1. 『第39回年次学術大会(速報)』

関西支部提案のホットイシュー「C会場：パンデミック環境において組織が失ったこと、得たこと」には、13件(他に全国から3件)の発表と熱心な討議があった。発表者とテーマ名は、以下のとおりである。発表論文とスライドを掲載した『講演要旨集』を発行、支部HPにも掲載していますので、是非ご一読ください。

・1C01 西原一嘉、三木基実、苗村昭夫、高田耕平、大槻眞一：

「パンデミック環境において組織が得たこと、失ったこと」

・1C02 本庄孝子、西原一嘉、大槻眞一：

「パンデミック下での再生可能エネルギー取組みの検証」

・1C03 谷口邦彦：

「パンデミックに立ち向かったNPOの活動」

・1C04 谷口邦彦：

「パンデミックの機会に地域整備に取り組んだ地方自治体の活動」

・1C06 谷口邦彦：

「大阪大学感染症総合研究教育拠点(CiDER)について」

・1C07 小池正夫：

「コロナ禍をのりこえて一社会の変化とシニアライフ」

・1C08 井端雅一：

「コロナ禍の経験から学んだ大阪公立大学 vision2030・・・」

・1C09 伊藤眞里：

「パンデミックと我が国のデジタルヘルス、AI創薬」

・2C01 豊田 繁：

「コロナ禍の終焉とワクチン(治療薬ゾコーバとは・・・)」

・2C02 盛本修司：

「パンデミック時の新型コロナワクチンやその他事業で、失ったもの得たもの」

・2C03 山下義裕：

「コロナ禍における感染予防ナノファイバーフィルターマスクの取組み」

・2C04 林 功：

「COVID-19における地域社会の健康危機管理体制構築への取組み」

・2C06 三森八重子：

「An Analysis of Impact of COVID-19・・・」

2. 『関西支部研究会 200回記念研究会』

関西支部長 大槻眞一

この度、関西支部は「イノベーションと地域創成」を年間テーマに掲げ、研究会を進めてまいりましたが、無事に200回目を迎えることができました。



これもひとえに、お忙しい中、ご講演いただいた講師の方々、会場やオンラインでご参加、熱心なご討議をいただいた会員の皆さま、そして企画、開催準備に尽力していただいた支部運営委員の皆さまのおかげと心から感謝を申し上げます。151回目の研究会(2019年12月)開催直後から新型コロナウイルスの感染が始まり、約半年間の休会后、徹底した感染防止対策で再開、現在は活動範囲も広げることができました。

200回を迎えた関西支部研究会は、今後も年間テーマを発展させ、科学技術の進歩と地域創生の実現を目指して活動を続けてまいります。今後とも皆様方のご支援をお願い申し上げます。



3. 研究会での参加者の声(感想文)紹介

①第 196 回研究会 (8月9日)

「YTB 読売テレビ局見学会」(写真)

- ・テレビ局のスタジオを直接見学でき、今後、TV 画像も興味深く観ることができる。
- ・“鳥人間コンテスト”では、飛行体の進化と最新の報道技術も分かり感動した。



②第 197 回研究会 (9月11日)

「近代から現代の科学史、海上保安の科学技術」

- ・海上保安庁の業務内容(高度な新技術を活用した海洋調査と警備)がよくわかった。

③エネルギー環境支部分科会 No4 (10月9日)

「積水化学水無瀬イノベーションセンター見学会」(写真)

- ・発見や閃きのイノベーションを起こす仕組み(技術プラットフォーム)が分かり刺激的であった。



④198 回研究会 (10月22日)

「西成の歴史と、新今宮地域振興の取り組み」

- ・西成の歴史がよく理解できました。
- ・フィールド研究から街づくりに繋げるプロセスに興味があった。このような文系のテーマも増やして欲しい。

⑤199 回研究会(11月22日)(日本鉄鋼協会と共同主催)

「鉄鋼・素材エネルギー産業のゼロカーボン取り組み」

- ・カーボンニュートラルに向けた難解だが興味深い講演だった。
- ・最先端のエネルギー変換技術とコストに興味を持った。

⑥200 回記念研究会 (12月7日)(前掲)

「日本におけるイノベーション創出と、レッドオーシャン市場のブランド価値戦略」

- ・特許やブランド価値の重要性と知財政策が理解できた。
- ・「記念誌」により関西支部の長年の活動がよくわかった。

4. 関西の大学めぐり(3)—近畿大学/原子力研究所の教育用原子炉

近畿大学の原子炉は、国内最初の大学教育用原子炉として 1961 年



11月に臨界運転開始。特徴は低出力(定格熱出力は1W)で安全性が高く、冷却設備無しで連続運転できる。若林教授より近大原子炉の歴史、活用状況、原子炉の上部にあがり、放射線測定器などの低線量試験の説明を受けた。現在稼働している教育研究用原子炉を保有する大学は近畿大学と京都大学のみである。



5. 関西支部からのご連絡

- ・「研究会 200 回記念誌」を発刊しました。

(2024.12.7)

6. 編集後記

8年ぶりの学術大会報告となり、今回は初めてのオンラインによる発表でした。6ページの論文提出後、内容はパワーポイントスライドで説明した。事前に、実行委員会でオンラインの発表練習をさせていただき、関係者に感謝しています。終了後、前記の支部発行の「講演要旨集」に寄稿し、冊子の出版が楽しみである。会員間、会員外の支援者との情報交換などで繋がり“れんけい”の深まりを感じ、今後も機会を見つけ報告をしていきたいと思えます。会員の皆様にも、是非発表をお勧めします。(小池正夫)

【発行】研究・イノベーション学会関西支部
<https://jsrpim-k.jp>

【別紙】話題のコラム（1）

「(寄稿) PICMET '24 に参加」※

三森八重子（会員）

1. はじめに

2024年8月4日から8日まで米国オレゴン州ポートランド市で開催された「PICMET '24」に参加した。PICMETはMOT（技術経営・技術管理）分野で世界最高峰とみなされている国際学会で、本拠地であるポートランド市と、ポートランド以外の米国の都市あるいは米国以外の国で毎年交互に開催される。今年の会場はPICMETの生誕地ポートランド市のダウンタウンにあるヒルトンホテルだった。



2. 27 か国から 149 本の論文発表

5日間の会期中、毎日朝1番のセッション（8:30-10:00）ではMOT分野で著名なスピーカーを招聘し、全体セッションが開催される。今年はスタンフォード大学のMarie Elisabeth Pate-Cornell教授やMITのMel Horwitch教授らが登壇し、Q&Aセッションでは会場の参加者から活発な質問があり盛り上がった。コーヒープレイクを挟んで、4-7セッションの分科会が平行で開催される。一般の参加者はこの平行セッションで発表を行う。

筆者（三森）は、今回は科学研究費（科研）で一緒に研究を行っている研究チームと組んで3題の発表を行った。1つのセッションに3-4名の研究者が振り分けられ、そのうち一人がチェア（司会者）に指名される。チェアの采配で20-25分の発表を行い、Q&Aセッションでは活発な意見交換が行われる。

夕刻には毎日のようにパーティが行われ、参加者が招待される。月曜日の夜は「カルチャー・デー」で開催国の文化や芸術が披露される。今年は地元ポートランドでの開催だったが、米国のポートランド州立大学の「Native American Student and Community Center」を会場に宴が開催され、ネイティブ・アメリカンの唄や楽器の演奏が披露され、その後はネイティブ・アメリカンの「ソウルフード」であるサーモンの料理がふるまわれた。

2日目の火曜日の夜はアワード・バンケット（授賞式晩餐会）の日。参加者全員がビジネススーツで参加し、着席のディナーがふるまわれたあと、各種の授賞式が行われた。今回はこれまでPICMETを30年あまりけん引してきたPresident & CEOのDundar F. Kocaoglu氏が高齢のため引退を発表するというハプニングがあった。

3. ローズシティを探索

忙しいPICMETのプログラムの間隙を縫って「ローズシティ」と呼ばれるポートランドの街を散策した。ポートランドは「マックス・ライトレイル」とよばれる路面電車が縦横に走っており（2時間半まで2.5ドル、一日5ドル）、車なしで人々が町中を散策できる米国では稀有な街である。

街はきれいに清掃され、建物もよく手入れされ、安心して歩き回ることができる。

1日目には町西部にひろがるワシントンパークを訪れた。64ヘクタールの広大な敷地内に日本庭園やバラ園があり、市民の憩いの場となっている。日本庭園は、回廊式庭園、茶庭、雑木の庭、平庭、枯山水の5庭園から構成され、多くの米国人観光客が訪れていた。2017年には隈研吾がデザインしたギャラリーとカフェが新たに加わった。日本庭園のすぐ近くあるバラ園に足を運ぶと610種、1万株のバラが出迎えてくれた（写真）。



2017年には隈研吾がデザインしたギャラリーとカフェが新たに

加わった。日本庭園のすぐ近くあるバラ園に足を運ぶと610種、1万株のバラが出迎えてくれた（写真）。

PICMETはもともとポートランド州立大学の教員が立ち上げた国際会議であるが、PICMETの会場となったヒルトンホテルから歩いて5分程度の所にポートランド州立大学の広大なキャンパスが広がる。州立大学の一角には「ポートランド美術館」があり、スニーカーの展示会「Sneakers Unboxed: Studio to Street」が開催されていた。スニーカーと社会の関連性に焦点をあて、社会の要求によってスニーカーが変貌をとげてきたこと、社会の変容によってスニーカーのデザイナー、スニーカー製造業者が変容を遂げてきたことを数多くのスニーカーの展示とともに訴えていた（写真）。



4. 終わりに

現時点（2025年1月24日）では2025年のPICMET '25の開催は発表されていない。日本への帰途、サンフランシスコに向かう飛行機の中からポートランドの街を見下ろしながら「きっと次回のPICMETでも研究発表を行おう」と心に決めた。

※PICMET : Portland International Conference on Management of Engineering and Technology

【別紙】話題のコラム（2）

「(寄稿) (釜山) 国際地質学会に参加して」

本庄孝子（会員）

1. (釜山) 国際地質学会

2024年8月末に釜山郊外のベスコで開催された The 37th International Geological Congress 2024 に友人に付き添って参加しました（写真）。



約 5000 人の参加です。宿は釜山駅前の東横インにしました。宿には日本のコンセントが付いていました。釜山の食事はどれもやさしい味でした。

友人は地質史の分科会で発表し、この分科会の参加者は 50 人ばかりです。韓国で国際会議が開催される場合、通常日本からの参加者は 100 人を超えますが、この会には約 30 人の参加でした。東大、地質調査所からの参加者がいません。

毎日会場まで、釜山駅から地下鉄で通いました。切符販売の窓口はなく、券売機には日本語と英語の表示がでる方式で、改札は入る時もある時も切符を赤外線を読みとる方式です。手元にたくさん切符が残りました。2 区間で 1900 ウォン、約 210 円です。切符の一番上の印字文字は、年月日何時何分、購入した駅の番号です（写真）。



フリータイムの時に、釜山にある国立日帝強制動員歴史館、釜山博物館、龍頭山公園を見学しました。韓国での国際会議 6 日間の終了後、友人が日本での地質に関するオプションツアーを主催しました。我々は外国人 20 人ばかりと共に、釜山から博多にフェリーで渡りました。出国の時、東横インに宿泊した我々は宿から頂いた書類を提出して免税の手続きをして、千円単位のお金が戻ってきました。

2. 北九州、長崎見学

北九州見学の旅は、雲仙普賢岳の火砕流の現場、がまだすドーム（雲仙岳災害記念館）、有田焼の今右衛門と陶磁器原料の採掘の現場、島原城、雲仙地獄めぐり、長崎恐竜博物館、長崎平和公園でした。

1991 年の雲仙普賢岳の噴火による火砕流で 43 名の犠牲者が出た付近は、市民の努力で緑が復活しており、現場には赤茶けたタクシーの残骸などがありました（写真）。



そこは危険区域外でした。有名な外国の火山写真家夫妻がビデオを取っていた所も危険区域外の高台でしたが、火砕流の犠牲になりました。

長崎では被爆直後のがれきが積み重なった地層を見学。被爆にあった長崎の浦上天主堂を信者も市民も長崎市も残したかったのですが、米国は破壊した教会の姿を残すことを許さなかったのです。それで、平和公園の隅に教会の柱 1 本を展示しています（写真）。

